

自然採餌条件におけるシマフクロウの繁殖給餌生態-その2

○竹中健（シマフクロウ環境研究会）・高田令子(ニムオロ自然史研究会)

本研究は魚食性の大型鳥類シマフクロウの自然採餌条件下での給餌生態を明らかにしようとするものである。2004年度の大会では自然採餌下では初めてとなる繁殖期の定量的な巢内給餌量を報告したが、2005年春に同じつがい同地点において繁殖を行ったため同様に観察記録を行った。本年度はその結果を報告すると共に、2004年度の結果と比較し考察する。

シマフクロウは日本では130羽程度が北海道のみに分布し(北方領土は除く)、絶滅危惧種(CR)に指定されている。研究者および環境省が主体となり人工給餌や巣箱設置などの保護策を実施しており、生息数の回復に大きな成果を挙げている。生息数が少なく夜行性のシマフクロウの生態に関しては、特に自然採餌下では十分な研究が行われていないが、自然採餌を行うシマフクロウの繁殖給餌生態を明らかにすることは、絶滅に瀕するシマフクロウの保護の上で、生息に必要とされる環境容量の把握という点で極めて重要である。

研究地域は北海道知床半島北部である。研究対象つがいは当初天然木の樹洞で繁殖を行っていたが、1995年に保護上の目的で巣箱を設置し、巣箱内に赤外線LED照明を装備したCCDカメラを装着した。事故死により繁殖つがいの入れ替わりがあったが、2002年から現つがいが繁殖を開始し、2004年から餌種と餌量、給餌パターンのデータ採取と育雛観察を行った。2005年も続けて繁殖を行ったためさらに詳細なデータ採取を目指した。観察記録は巣から200mの距離に録画デッキを設置し、自動車用バッテリーを運搬して24時間の連続運用を可能な限り行った。生息地への入り込みは日中に電源の交換のため行うだけにし、昼夜の直接観察や巣への接近は行わなかった。

2004年繁殖期は2羽の雛を巣立たせ、巣内育雛約50日間のうち41日間の観察を行い、349回の餌の搬入を観察した。給餌回数は1-2週は1日約5回で、3週目から増加し第5週に20回前後になった後低下し、巣立ち前には5回程度であった。給餌回数種は河川性魚類(オショロコマ)が45%、海水性魚類(カレイ、ガジ、アイナメ)が21%、カエルが29%、小型哺乳類(ネズミ、モモンガ)が4%、不明1%であった。給餌種の推定重量割合は河川性魚類39%、海水性魚類54%、両生類5%、小型哺乳類2%で、一日平均1136gであった。

2005年繁殖期は2羽の雛が育っていたが、1羽が孵化後45日に餌の飲み込みに失敗して窒息死した。残った1羽は孵化後52日で巣立った。観察は抱卵35日間で19日間、育雛52日間で49日間行った。抱卵期の雄から雌への給餌回数は一日2-4回で日中は全く行わなかった。搬入を確認した54回のうち、河川性魚類が43%、海水性魚類が33%、カエルが9%、小型哺乳類が4%、不明11%であった。また育雛期の搬入確認は465回で、河川性魚類66%、海水性魚類8%、カエル22%、小型哺乳類3%、小型鳥類0.4%、不明1%であった。育雛期の給餌推定重量割合は河川性魚類68%、海水性魚類25%、カエル4%、小型哺乳類2%、小型鳥類0.4%で一日平均876gであった。

給餌パターンは2004年と2005年もほとんど同じであったが、一日の平均給餌回数がわずかに増加した。餌内容が2004年は海水性魚類にかなりの部分を依存していたのに対し2005年は海水性魚類への依存度が低下した。その分は河川性魚類が占めており、給餌回数を増加させる事で対応したよう

だが、2005 年は周辺環境中に河川魚類が多かったことが示唆され、同時にシマフクロウは可能な限り
巢の近傍の餌資源を利用することが示唆された。

さらに詳細な解析は当日の口演で発表する。